

2020年10月11日 久宝教会 神学校日（聖霊降臨節第20主日）礼拝

メッセージ「荒野で神に会いに行こうや」岡嶋^{ちひろ}千宙伝道師（向^{むかい}島^{じま}伝道所）

聖書 出エジプト記 17章1-7節

マタイによる福音書 4章1-2節

Introduction 「ここはどこ？わたしはだあれ？」

幼いころの記憶、誰もが、一つや二つ、持っているものでしょう。もちろん、わたしにもあります。わたしはテレビが好きで、小さいころにテレビで聞いた音や言葉、あるいは音楽や映像を、今でもいくつか覚えています。例えば、NHKの教育テレビで、現在も続いている「おかあさんと一緒」という番組で、当時放映されていた「ニコニコポン」というプログラムのオープニング。「♪にこにこじまがありまして」から始まり「じゃじゃまる ぴっころ ぽろり ときどき あっちむいて ぷん♪」で終わるあの歌。あるいは、アニメ番組「Dr. スランプ あられちゃん」の主人公、あられちゃんが言う「んちゃ！」という挨拶など。

もう一つ、強烈に印象に残っているフレーズがあります。「ここはどこ？わたしはだあれ？」初めてこの言葉を聞いたのは、たぶん、小学生のとき。テレビのお笑い番組だったと思うのですが、誰が、どんな風に使っていたのかは覚えていません。調べてみたら、1979年に放映された「赤い嵐」というドラマで、能勢慶子さん演じる小池しのぶという人物が、記憶を失ってしまったがために発した言葉だったそうです。その当時は、あくまでも他人事として覚えていたこの言葉ですが、時を経る毎に、自分のものになっていきました。歳を重ねて大きくなり、自我が芽生え、「自分」と「他人」との違いに気づくようになると、生活圏も広がってきます。そして、もちろん、記憶を失ったわけではないのですが、成長とともに、自分自身を見つめる言葉、自分の存在を確かめるための言葉、自分の居場所を探し求めるための言葉として、突き刺さってくるようになりました。

「わたしは誰なのか？」「わたしは何者なのか？」「ここで何をしているのか？」「なぜこの場にいるのか？」社会人になってからも、受洗してキリスト者として生きるようになった後も、神様からの召しを感じ伝道者とし

て歩むための道を進みだしたときも、そして、今でも、響き続けています。存在の根源に関わる「わたしの」この問いは、個人として響くだけではなく、共同体として、集団として、強く突きつけられることもあります。イエスを救い主として信じるキリスト者であり、教会に連なる者である「わたしたち」。キリスト者であるとはどういうことなのか？ わたしたちがその一部であるという教会とは何なのか？ この地にあつて、この場所にあつて、わたしたちキリスト者は、わたしたちの教会は、何をなすべきなのか？ どのように生きるべきなのか？

Development ユダヤの民の不平／アイデンティティの模索

【民の不平】

今朝与えられた「出エジプト記 17 章 1-7 節」。今から約 3300 年前。400 年にもおよびエジプトでの奴隷生活を強いられていたイスラエルの民は、指導者モーセに率いられてエジプトを脱出します。数世代にわたって続いた奴隷状態をようやく抜け出し、自由人としての一步を踏み出した民。しかし、彼らを待っていたのは、荒れ野での放浪、という過酷な旅でした。エジプトを脱してから約 2 ヶ月後、民はしばしの休息を取るためにレフィディムと言う土地に入りますが、飲み水がありません。様々な苦難を経験した民は、予期しない過酷な環境に嫌気がさして、モーセに不平を言います。

「飲み物をくれ！わたしたちを殺す気なのか！」

民の不平を聞いたモーセは、その土地を、「マサ」と「メリバ」と名付けました。「マサ」は「試し」、「メリバ」は「争い」。飲み水がなく、のどの渇きに我慢ができなかった民が、モーセと争い、神様を試したからであるとされています。確かに、民の言葉と態度を考えれば、それは「不平」であり、「争い」であり、ゆえに、神様を、あるいは指導者モーセを「試す」と判断されて当然という感じがします。実際、この出来事は、聖書の他の箇所にも記され、イスラエルの民の態度は、神様による救済史における、いわば「汚点」、あるいは、「失敗／失態」というニュアンスで記録されています。ですが、この箇所で描かれている場面の状況、さらには「出エジプト記」が現在の状態に編纂されたときの時代背景を考えると、それほど単純には、不平ということだけで民の態度を失敗／失態として批判できないのではないかと思えるのです。

【存在根源追求の声】

約 400 年に渡り、エジプト人の奴隷として苦難を強いられていましたイスラエルの民にとって、エジプトは異国の地。数世代に渡り生活し続けているとはいえ、そこは、「他者」の土地であり、「自分たちの」土地ではありません。見知らぬ誰かの土地に住むイスラエルの民は、異国に寄留する民でした。故郷を失い、異国の地で、数世代にもわたって、奴隷として生きる。文章にすれば単純ですが、実際にそれを体験するとなったらどうでしょう。わたしは、海外で生活したことがあります、長くて 1 年半。もちろん、奴隷ではありません。帰れる故郷、帰れる国がありました。イスラエルの民が経験したこととは全く異なっています。

400 年のときを経て、ようやく異国での奴隷生活に終止符が打たれた。エジプトからの脱出。「やっと、自分たちが、自分たちらしく、他国の影響を受けることなく、生きる道が備えられた！」胸を弾ませて期待したことでしょう。それなのに、待ち受けていたのは、エジプトにいたときと同じように、いや、それ以上に過酷な状況でした。荒れ野での渇き。実は、本日の箇所に向き着く前に、イスラエルの民は 2 度にわたり、不平を述べ、神様を試しています。一度目はエジプトを脱出してから 3 日後、マラという土地で、その土地の水が苦くて飲めない、という不平。二度目は、それから 1 ヶ月半後、有名なマナの奇跡が行われた際の空腹に対する不平。そして、3 度目、今回の飲み水がないという不平。空腹と渇き。食べ物と飲み物。生命維持にとって必要不可欠な要素がかけている状態が繰り返される。食料と飲み物が枯渇するという状況は、物質的に見れば、「肉体的な死」を想定させます。しかし、当時のイスラエルの民が経験してきたことを考え合わせれば、それは単に肉体的なことに留まりません。「精神的」、あるいは「霊的な死」をも意味したことでしょう。

当時の状況を、今の形でわたしたちに伝え記してくれた出エジプト記の編集者たちは、その意味を肌身で感じていたはずで、出エジプトの出来事から約 1100 年後、紀元前 530 年以降、バビロン捕囚が終結してからのこと。ダビデ王によって樹立されたイスラエル王国が南北二つに分断され、それから 200 年後の北王国の滅亡、さらには約 350 年後の南王国の崩壊とバビロン捕囚を経て、イスラエルの民は故郷を失います。民はバラバラになり、異国の地で、政治的にも宗教的にも荒廃した社会状況の中で苦難の

生活を強いられます。バビロニアの地で、見知らぬ人たちの間で、息を殺すようにして生きていたイスラエルの民。40年後、世代が変わり始めた頃、捕囚が終わり、民は故郷エルサレムへと帰っていきます。しかし、そこで彼らを待っていたのは、荒れ果てた故郷でした。エジプト脱出を経て、荒れ野を彷徨っていた民の状況と似通っています。「出エジプト記」の編者たちは、自分たちの飢えと渇きを、先祖たちの姿に重ねざるをえなかった。だから、先祖たちの口を通して、自分たちの苦しみを、先祖たちの不平という形で、「出エジプト記」の中に記し残した。

荒れ野における民の不平。2節「飲み水をください」、3節「私たちをエジプトからのぼらせたのは何のためだったのですか。私や子どもたちや家畜を渇きで死なせるためだったのですか」、7節「主が私たちの間におられるのか」。これらの言葉の背後には、単に喉の渇きに対する不平とだけでは言い切れないものがあつたのです。日本語では「不平を言う」と訳されている言葉。これはヘブライ語では、もともと「宿をとる」「一夜を過ごす」「守る」という意味で用いられている言葉です。他動詞として用いられ、相手が想定される場合に、「不平を言う」と訳されるのですが、元の意味を考慮すると、「不平を言う」というのは「いったん立ち止まる」「立ち止まり、振り返る」というニュアンスが含まれていると考えられます。

「不平を他者にぶつけることによって、その相手と共に、立ち止まり、見返してみる」。荒れ野という過酷な環境の中で、飢えと渇きの苦しみを体験したイスラエルの民が、それでもなお、自分たちをエジプトから救い出した神様を信じて進もうともがく姿。神様を信じながらも、なお、体の弱さを痛感し、自分たちの存在意義を、神の民としてのアイデンティティを問い直そうとしている。「ここはどこなのだ?」「どこにいるのか?」「この地で、何をしているのか?」「この地で、わたしたちはどうやって生きていけば良いのか?」「モーセが、ダビデが、わたしたちに示した神は今なにをしているのか?」「その神を信じていたわたしたちは、いったい何者なのか?」

Turn わたしたちの問い 関係性の中で問う

出エジプトの出来事から3300年経った今、全く同じとは言えないまでも、わたしたちは、人生に降り掛かる様々な困難や苦難を前にして、空腹を覚え、渇きを覚えます。コロナウィルス感染拡大により世界中に多くの重篤

者・死者が出ている現代。貧富の差が拡大し、今日を生きることすらままならない人たちが多くいる世界。自国優先主義のもとで他者を愛するのではなく、競い争うことで自己利益を確保することが当然とされる世の中。

「信仰」という標識を掲げながら他者の痛みを無視してまでも不明瞭で不条理な「一致」を迫る宗教界。社会の、政治の、宗教の、信仰の危機といえる今、この時。わたしたちも、問いたくなります。

「ここはどこだ?」「わたしはいったい何者なのだ?」「この場所でわたしは／わたしたちは何をしているのか?」「神を信じるものとして、このままでよいのか?」「このあり方で良いのか?」「この教会の姿でいいのか?」もし、この問いを、一人で抱えなければならないとしたのなら。誰にも打ち明けることができずに自分自身にしか向けられないのだとしたら。あるいは、一つの共同体の中だけで、この問いを投げ続けなければならないのだとしたら。これが外に向けて発することのできない問いなのだとしたら。答えのない状況に絶望し、生きる気力を失うこともあるかもしれません。もしかしたら、その果てに、自らの命を断ち、あるいは共同体を破滅に追いやってしまうこともあるでしょう。

ですが、聖書はわたしたちに示してくれます。一人ではない。荒れ野をさまようイスラエルの民が、三度にもわたって過酷な状況について不平を言ったとき、そこには必ず聴き手がいました。モーセです。そして、そのモーセには、モーセ自身の不安をぶつけられる相手がいました。主なる神様です。何度も、何度も、民は、不平の言葉を、自分たちの存在の根源を問う心の声を、モーセに、そして神様にぶつけました。ぶつけられるたびに、神様はモーセを通して応えられていきました。不平の言葉は、荒れ野に消えてしまう、はかない音にはならなかった。存在の根源を問う心の声は、モーセを通して神様に届けられ、そして神様によって応えられることにより、確かに、民を生かす命の言葉に変わっていったのです。神様は、民を見捨てられなかった。

Conclusion イエスに向けて問う

「ここはどこ?わたしはだあれ?」出エジプトから 3300 年。今を生きるわたしたち。わたしたちにも、この問いをぶつけることのできる相手がいます。わたしたちが空腹を覚え、渇きを覚え、存在の根源を問う言葉を発

する時、その声は、確かに、聴かれています。いや、正確には、その方自身によって引き継がれ、聴かれ、そして、応じられているのです。イエス様によって。神ご自身であるイエス様によって。

イエス様もまた、イスラエルの民と同じように、見知らぬ土地に足を踏み入れ、荒れ野をさまよひ、命の危機を迎えます。伝道を始める前、40日間の荒れ野での生活において、空腹を覚えられます(マタイ 4:2、ルカ 4:2)。宣教を始め、エルサレムへ向かう途中に立ち寄った異端の地、サマリアで渇きと空腹を覚えられます(ヨハネ 4章)。さらに、死が目前に迫った十字架上で渇きを覚えられます(ヨハネ 19:28-30)。命の道のりにおいて、空腹と渇きを覚え続けられたイエス様は、その度に、まるで、イスラエルの民の声に応えるかのように、語り、示し、行動されます。

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」(マタイ 4:4、ルカ 4:4)、「私が与える水を飲む者は決して渇かない。私が与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る」(ヨハネ 4:14)、「私の食べ物とは、私をお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである」(ヨハネ 4:34) イエス様がわたしたちと同じように空腹と渇きを経験し、同じように問いを発したからこそ。わたしたちの問いに対して、その身をもって、応じてくれたからこそ。おそらく、わたしたちが経験する一つ一つの空腹や渇きに対して、分かりやすく、実現しやすい明確な解決策、というものはありえないでしょう。

「ここはどこ？わたしはだあれ？」という存在根源に関わる問いに対して、誰にでも当てはまる答えはないのだと思います。

いや。どんな答えが与えられるのか、が重要なではありません。その問いが「誰に」向けられるのか、なのです。わたしたちは、絶望することはありません。押しつぶされることはありません。むしろ、堂々と、胸を張って、この問いをぶつけるのです。神様の言であり、わたしたちの間に、確かに生きてくださっているイエス様に向かって。イエス様が、神様が、わたしたちの声を聴き、その声に応じていてくれるのですから。